

## 第17回夏期福音特別集会(2) (鹿沢)

## 天国

## ——マタイ伝第13章24～46節——

1970年8月22日

小池辰雄

神の支配したもつところ 立体構造 王 万人はこれ宗教人である 王と僕 信仰の世界に立ち帰らなければ 回心せよ 神の誠そのもの 屍を乗り越えて 罪は雲散霧消した 霊の貧しき者 無を賜る 恩寵の事実 十字架を負って進んで行く 万人救済 天国素 天国の徴 一つ 台風の目玉 新天新地

## 【マタイ13】

24 また他の譬を示して言いたもう 『天国は良き種を畑にまく人のごとし。』

25 人々の眠れる間に、仇きたりて麦のなかに毒麦を播きて去りぬ。 26 苗はえ出

でて実りたる時、毒麦もあらわる。 27 僕ども来りて家主にいう 「主よ、畑

に播きしは良き種ならずや、然るに如何にして毒麦あるか」 28 主人いう 「仇

のなしたるなり」僕ども言う 「さらば我らが往きて之を抜き集むるを欲するか」

29 主人いう 「いな恐らくは毒麦を抜き集めんとして麦をも共に抜かん。 30 両な

がら収穫まで育つに任せよ。収穫のとき我かる者に「まず毒麦を抜きあつめて、

焚くために之を束ね、麦はあつめて我が倉に納れよ」と言わん」

31 また他の譬を示して言いたもう 『天国は一粒の芥種のごとし、人これを

取りてその畑に播くときは、 32 万の種よりも小さけれど、育ちては、他の野

菜よりも大きく、樹となりて空の鳥きたり、其の枝に宿るほどなり』 33 また

他の譬を語りたもう 『天国はパンだねのごとし、女これを取りて、三斗の粉

の中に入るれば、悉とく脹れいだすなり』 ……

45 また天国は良き真珠を求むる商人のごとし。 46 価たかき真珠、一つを見出

さば、往きて有てる物をことごとく売りて、之を買ふなり。

## ●神の支配したもつところ

この第2回集会は「天国」と題しました。昨日も申し上げましたように、この集会は、私の30年の惨憺たる伝道の総決算みたいなもので、ただキリストをのみ告白しようとして参りました。申し上げている通り、私たちが「キリスト教」ではなくして、この喜びの音信は「キリスト道」です。イエスが、マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネを通して語って



いらっしやる内容は、もし一言で言うならば、「天国」あるいは「神の国」、これに尽きる。特に、マタイ伝においては

### 「天国」

という言葉が大変多くでてくる。後の三つでは

### 「神の国」

という言葉の方が主に使われている。なぜ、マタイ伝は「天国」という言葉を使うかという点、この福音書はユダヤ人のクリスチャンに向かつて語っているため、ユダヤ人というのは「神の名前をみだりに挙ぐるからず」という、それで

### 「ヤハウエー」「神」

という言葉非常に畏れかしこみまして、経典を読むときも、そこを

### 「アドナイ」「わが主」

というように読んでいます。それで、「神の国」の「神」という言葉もそこで少し避けまして、「天」という言葉に置き換えた。こういうわけです。

この「天」というのはなにも空間的な天を言うのではない。もちろん、我々の意識の上では、五感の上では、上に見上げる事態を天という。いくら私たちがいわゆる20世紀の文明人といえども、やはりそういった感覚は昔と同じようなものがあると思います。天と言ったって、上と言ったって、宇宙に上も下もないではないかと、科学的には思うかも知れませんが、でも。そんな意識ではもちろんないわけです。

### 「天にまします我らの父よ」

とキリストが言われた、その天は神を別な表現で言われたわけです。東洋の思想では、この天というのが非常にまた重要な意味をもっている。これは神とまでは、はつきりとした信仰の対象にはなっていませんけれども、孔子、孟子においてもやはり、天というのはそういう宗教的な角度はもっているわけです。

「天国」というと、なにか、普通、死んで向こう側に行くところが天国と、常識的には思うわけです。そういう面もありますけれども、「神の国」「天国」というのは、もちろん、神さまの支配したもうところで、いわゆる場所的なのではない。今、我々がこの集会をしている、ここが即ち天国であります。神の国である。そういう意味においては、いわゆるキリスト教会の「教会」というような概念よりもはるかに広いもので、無限無量な無限定な自在なものであります。神の在いましたもうところ、神の支配したもうところ——「神が在ます」ということは神が支配し給うということ——そこが即ち、天国であり、神の国である。そういうことで、旧約聖書から少し展開しながら参りたいと思います。

### ●立体構造

旧約聖書というのは、ユダヤ人というものはそういった霊的な事態を非常に具象化して



表現することをしている。具象的な表現をしながら、しかし、それは決して偶像的な内容にはならない。その点、聖書を読みちがえなさらないように。

「それは神話ではないか」

とかいうようなことでもつて、普通の人はそこを読みちがえる。

「そういう表現をもって、いかに霊的な現実を語っているか」

ということ、読みちがえをしないようにしないと、若い人はすぐ躓くわけです。ことに科学的な、対象を認識するような角度からものを把握しようとしたら、聖書は全然、捉めなくなってしまう。

列王記略上の 22 章をちよつと開いてもらいましょう。

「<sup>19</sup>ミカヤ言いはれば汝エホバの言を聴くべし、我エホバのその位に坐

しいたまいて天の万軍のその傍らに右左に立つを見たるに」(列王記略上 22・

19)

と書いてある。今申したように、非常に具体的です。

「エホバのその位に坐したもう」

と言ったつて、これは分からんですよね。

「天の万軍のその傍らに右左に立つを見る」

と。もちろん、これは霊的な事態を示されて、そのような表現をしているわけです。「霊視」といって、霊的に視るとい場合もちろんあるわけです。即ち、これは我々の相対界に対して、或る絶対界の事態をこういつた表現でもつて言っているわけです。神は何処にいまし給うか。空間的には限定できない。その神が絶対界にいらつしやるその姿をこういう表現で——黙示録もそうです、また、エゼキエル書あたりにも出てきますが——語られている。

「天の万軍」

という。一体、「万軍」の内容は何か、というようなことにもなりますが。もちろん、天使にはいろいろ種類があります。ラファエルとか、ミカエルとか、ガブリエルとか、七つの天使、修羅天使とか、またその他に天使たちもいます。それから、アブラハム、イサク、ヤコブというように、神を信じて天界に往つて、今は天に現在しているところの人たちもみな天の万軍です。信仰の徒は、名があつてもなくても、みなこれは天の万軍の中に入っている。私たちは、この天の万軍、神のみそばにあるところの、その神の民です。「神の国」と言うのに、「神の民」という言葉もまたあります。地上の生涯でなくて、天界のそういった活ける者——

「我は活ける者の神である」

と言われた——モーセもエリアも、もちろん、この活ける万軍の勇士たちであります。彼らはイエス・キリストに変貌の山で現れてきた。我々の天国の内容というものは非常に立



体的なんです。この地上の私たちよりも、天界の、霊界の、そういった人たちが天の万軍としてある。だから、天国というのは、

「神の支配し給う」

というのは、そういった絶対界と相対界の一切にわたってわたっているわけです。

「御意の天に成るごとく、地にも成らせたまえ」

という。

「天界において、天の神の国において成るように、また地の神の国においても成つてくください」

と。そういった立体構造である。

ですから、人々が向こう側に生きましても、決してただ死んだのではない。こないだ、T 姉が天界に往かれました。しかし、彼女は今日、私たちと一緒にこの集会を天において連なっていてくださる。正に、生き生きとして私たちに天から祈りをもって助けていてくださる。我々においては、いわゆる相対的なそういったところを抜けてしまった。この相対界が既に絶対界である。その意味において、天国というのは何と素晴らしい立体的な内容をもっているか。時間的にも過去と現在と未来にわたっております。そういう広々とした無限無量の気宇というものを私たちクリスチャンは大いに持つべきである。キリストが「天国は」「神の国は」と言った音信は、

「この福音書に満ち満ちているものは何と現実なものか」ということなのであります。

## ●王

イザヤ書の 6 章をみると、

「ウジヤ王の死にたる年

これは紀元前 739 年から 738 年あたりですが、

われ高くあがれる御座にエホバの坐し給うを見しに、

ここにも「神さまの坐し給うを見しに」と書いてありますね、

その衣裾は殿にみちたり。<sup>2</sup>セラピム

「セラピム」というのは火焰天使です。

その上にたつ、おのおの六つの翼あり、その二つをもて面をおおい、その二

つをもて足をおおい、その二つをもて飛翔り。<sup>3</sup>たがいに呼び言いけるは、

聖なるかな聖なるかな聖なるかな、万軍のエホバその栄光は全地にみつ。

<sup>4</sup>かく呼ばわる者の声によりて闕のもしき、家のうちに煙みちたり。

非常に壮大な霊的な幻に、現実にはぶつかりまして、イザヤは言っているわけです。



5 このとき我言えり、禍いなるかな我ほろびなん、我はけがれたる唇の民の  
なかにすみて穢れたるくちびるの者なるに、わが眼は万軍のエホバにましま  
す王を見まつればなりと。」(イザヤ6:1-5)

「天国」「神の国」という、それは「神は支配する」ときつき申しました。「支配する」という言葉を今度は名詞にすると、「王」ということなんです。ヘブライ語の「マールラック」という字がそういった性質をもった言葉です。「統べ治める」ということと、「メレク」「王者」ということが同じ字で使つてある。今は、「民主主義」と言ひまして、

「王というものはお伽話の国だ。イギリスには王様がいて、あんなのは時代遅れだ」なんてなことを普通は思うわけです。こちらでも、天皇陛下というのは象徴というわけで、この頃の若い人たちは「天ちゃん」なんて言つていますが、そういった「天」の字をとんでもない言い方をしています。

「王者、統べ治める者、その御意の行われるところ」

という考えとはおよそ隔たつてしまったところが今の民主主義というやつです。

「人の上に人なく、人の下に人なし」

とか言つているが、しかし、

「人の上に神がある」

ことを忘れてしまつています。これは根本的な欠陥であります。

### ●万人はこれ宗教人である

私はこの春から、中学・高等学校の校長になつてしまつたが、就任の開口一番、西郷南洲の

「敬天愛人」

という言葉掲げて、そのことを言つた。「天を敬する」というのは、それは神さまでも仏さまでもいいが、とにかく、人間以上の絶対者がある。そういう畏るべきものを敬する。畏神、敬神という。キリストは敬天愛人を一つにしてしまつた。エイブラハム・リンカーンも、その民主主義の発端をなした有名な三分間演説の後ろの方に出てくるけれども、

「神の下にあつての民主」

ということを言つています。そのところをいい加減にして、ただ人間ばかり考えていたら、リンカーンの気持には反する。クラークさんも

「少年よ、大志をいだけ、キリストに在つて」

と言つた。この「キリストに在つて」はじゃまと見えまして、これを取つてしまつた。それでは、同じ「アンビシヤス」(大志)も、とんでもない話なんだ。キリストに在つての志でなくて、手放しの志であつたら、これはいわゆる野心になる。これは自我の膨れ上がりになつてくる。いわゆる名誉心になる。



そういうことで、神を忘れてしまった。はつきりと 20 世紀の文明は没落に向かって進んでいる。物質の方からいつてもそうでしょ。非常に文明が発達してきてしまつて、この頃は公害で大騒ぎだ。信州の方はまだ公害ではないけれども。東京からこちらへ来ますと、本当に別天地です。これは本当に天国ですよ。空気は本当に澄んでいるし、人間の気持がみな本当の人間らしさを持つていらつしやる。東京はもうなにか警戒心ばかり発達してしまつて、すぐ、人のことをどうのこうのと言う。海がだんだん汚れてきて、太平洋の魚までおかしくなつてきた。海中で原子爆発実験なんかして。マグロも食えなくなつてしまった。文明は結局、人間を滅ぼすことになる。

#### 「自然に帰れ」

ということをルッソーが言いましたが、正に今は「自然に帰れ」です。けれども、さて本当に自然に帰れるかな。

とにかく、一切の問題は結局、魂や心の問題に帰着する。どんな問題も、およそ人間の営むことはすべて、その中心は心の問題に来るわけです。魂、心の問題は何であるか。宗教の問題です。信仰の問題。だから、私がいつも申し上げているとおり、

#### 「万人はこれ宗教人である」

と言う。万人は救いを要するものである。信ずるとか信じないとか、そんなことはもう問題ではない。

今の教育は行き詰まつているのだから、もうはつきり、絶対次元からもを言わなかつたらダメです。また、これを言うと、人間の魂は一番本ものに触れば、誰でもが何か感ずるんです。キリストは水を割らずにものを仰つた。水を割らずにぶつかつていくことが一番大事なことです。

人間の関係もそうです。お互いに第三者のことをどうのこうののではない。お互いに目と目を合わせて語つて、それももちろん、本当にお互いに愛の心をもつて建設的に語つていけば、何も問題はない。どんどん展開していく。

#### ●王と僕

王者。王国なんです。「王の王」という。キリストは正に天界にあつて真の王者である。普通、この「王者」という言葉はあまりいい感じをもたない。だから、ある意味において、「民主」ということを言いたくなるし、またそこに真理もある。けれども、本当の王者は「僕しもべ」なんです。これはキリストはそのことをはつきり自ら実践されたわけです。王者というと、専制的な、自分の勝手なことをやつて、民を苦しめたのがたくさんいる。だから、王様なんていうのはけしからんということになるわけです。けれども、本当の王は民の一人びとを思つて顧みて、そのために心から自ら仕えていくような王者が本当の王者です。だから、キリストは地上においては、「神の僕」である。真の王者が僕である。これは絶対の矛盾の



同一なんです、王と僕が。神の僕ということ。

ダビデはとんでもないこともしましたけれども、しかし、

「アブラハムの子、ダビデの子」

と言って、キリストの系譜に出てくるこのダビデがとにかく、相対的な意味において理想を象徴するような王者であったから、ダビデをそういうふうにもつてくるわけです。フリードリッヒ大王が、

「自分は国家の第一の僕である」

と言って、彼は散歩しながら民の直訴を受けた。そして、

「フリッツのおじさん」

と愛称で呼ばれた。真理の前には本当にフリードリッヒは謙虚であった。だから、

「偉大なるフリードリッヒ」

と言われるわけです。彼はそういった福音の気持を受けていた王者でありました。

神が続べおさめたもう。イエス・キリストはこの地上においては徹底的に僕でありたもうと同時に、天界において王者でありながら、かつまた、私たちに本当にくだつてきてくださる。このことは、イザヤ書の57章15節を見ると、

「<sup>15</sup>至高<sup>いと</sup>至上なる永遠にすめるもの聖者<sup>せいじや</sup>となづくるもの

今度は、王者が「聖者」です。

如此<sup>かく</sup>いい給う、我はたかき所きよき所にすみ、亦こころ砕けてへりくだる者

とともにすみ、謙<sup>へりく</sup>だるものの霊をいかし、砕けたるものの心をいかす。」(イ

ザヤ57・15)

非常に著しい言葉です。畳みかけて言っている。

自分をそのままさらけ出すことが「砕け」です。真心というのと同じです。そういった、

「あるがままに自分をさらけだして、「主さま」と言って全身を投げかけてくる者

と一緒に住む。そういった者の中に私は入っていくぞ」

と。これが「聖者」です。聖者は決して審きたまわない。砕けの魂の中に入ってきて、それを玉成する。玉と成す。玉砕すれば玉成する。そのようにして、救い上げるのが王者の本願であり、王者の大願である。王者はみんな一人びとりをそのように救い上げるところの、本当に思いやりのある王者です。

「汝<sup>じ</sup>ら父の慈悲なるがごとく」

という。これは本当に思いやりの深いということです。慈しみ思いやり。孔子の教えも、

「恕<sup>じよ</sup>なるかな」

という。「恕」という字が思いやりという字です。

聖者はそのようにして、砕けた者の中に入ってきた。「キリスト教」なんて言ったって、私たちの福音は、これに遭わなかったら、私はもうどうにもならんですよ、もう即刻今日



やめなければならぬ。このキリストの憐れみによつて私は立っているんだ。

「小池先生は立派で」

なんて言ったら、私はすぐ逃げて行ってしまうから。ちつとも立派ではない。

●信仰の世界に立ち帰らなければ

イザヤ書43章15節に、

「<sup>15</sup>われはエホバ、なんじらの聖者、イスラエルを創造せしもの又なんじらの王なり。」

とある。私はヤーヴェーであると。聖者であり、創造者であり、また王である。また、或るところでは、「贖う者」という。すぐ、その前に出ている。イザヤ書43章1節、

「ヤコブよなんじを創造せるエホバいま如此<sup>かく</sup>いい給う。イスラエルよ汝をつくれるもの今かく言給う。おそるるなかれ我なんじを贖えり。我なんじの名をよべり。汝はわが有<sup>もの</sup>なり。」

と。即ち、王者は同時に「贖い主」であり、そして、一人びとりの名を呼んで、ちゃんと知っている。私のものだと。

「汝はわが有<sup>もの</sup>なり」

と。王者のものであるということは、王者の御意を本当に体する者。それに「はいつ」と言つて従う者。そういう世界が王国の性格なんです。そうすると、いわゆる民主主義とだいぶん違う。民主主義は各人の人格は自由である。そして、自分の思うところを大いにやつてよらしい。何も従うことはない、従うとか敬うとかいうことを非常に嫌うわけです。

ところが、この「自由」というやつが、「自我」というやつがくせものなんです。外国との関係も要するに、自己の利益を、あの国のためにひとつこちらは少し遠慮しましょう、なんてどこの国が言ったかね。みんなこれはすべて自国の利益のためです。おおよそ、国というものは利益のためしか考えない。いわゆる利益のためが本当にその国民のためか。大切なのは

「真理に生きている」

ということ。個人では真理ということを使うけれども、まず、国家となると、真理はどこかへ行つてしまう。或る程度はありますよ、けれども、やはり、国家というものは自我の象徴みたいなものだ。両方でぶつばなすと、今度は本当にどっちも滅びてしまうから、仕方がないから、しばらく協定を結んでおこうなんて。大体、平和なんていうものはそんなものだ。

だから、要するに、もう20世紀のすべての問題ははつきり、宗教に、本当の信仰の世界に立ち帰らなければ、どうにもならないギリギリのところすべての現象が来ます。経済問題であろうと、政治問題であろうと、教育問題であろうと、何であろうと、文明その



ものが。やはり、人間は敬うべきものを敬い、本当にそこに尽くさないことには、実は魂も社会も国家もどうにもならない。これは非常にはっきりしている。そういう問題にぶつかって、私たちはどうしても、

「神の国のためには身命を賭して生涯を」

ということにならざるを得ない。そこに本当の生き方があるし、本当の喜びがあるし、本当の希望がある。その他のことをやっていたら、必ずダメになるに決まっている。

### ●回心せよ

マタイ伝3章を開きます。まず、キリストの前に預言者が現れてきた。これは最後の預言者、申すまでもなく、洗礼のヨハネです。イザヤ書40章の言葉がそこに引かれているように、

「その頃バプテスマのヨハネ<sup>きた</sup>来り、ユダヤの荒野<sup>あらの</sup>にて教<sup>おしえ</sup>を宣べて言う、<sup>2</sup>『な

んじら悔改めよ、天国は近づきたり』(マタイ3:1～2)

この「悔改めよ」の言葉の本当の訳は

「回心せよ」

ということ、

「心をめぐらせ、心の向きを変えろ」

ということ。悔いて改める」という、そのままの意味もその中から出てきますけれども、自己本位の自己義認の自己弁護の、そういった角度から心を翻して、自己から天に、神にぬけると。磁石は常に北を指す。我々の魂は常に天極を指せよというんです。北極でも南極でもない。

「天極を指せ。神に向かえ、キリストに向かえ」

と。これが即ち、「悔改め」という意味です。そこから自分の個々のいろいろな間違ったことや何かに対する悔改めという具体的なことも出てきます。まず、心の向きを変えなくてはいかん。自分を見て、自分をいくら良くしようとしたってダメなんだよ、いくら経つても、百年清河を待つがごとくで。

それが「悔改めろ」ということです。もつとも、具体的に旧約の律法がありますから、それに従って生きろという面をこの預言者洗礼のヨハネの気持の中にありますけれども、しかし、悔改めというのは、そういう

「心を翻せ」

ということ。です。

「天国は近づいた」

もう間近かであるぞと言う。マルコ伝1章14節を見ると、

「14 ヨハネの囚れし後、イエス、ガリラヤに到り、神の福音を宣<sup>のべ</sup>伝えて言い給う、

15 『時は満てり、神の国は近づけり、汝ら悔改めて福音を信ぜよ』(マルコ1:15)



14 (15)

とある。キリストはヨハネの言葉をもつてきまして、今度は自分の言葉にして仰った。時は満ちた。もうこれでギリギリである。暗黒の時は満ちて、今、光明の時がやって来た。夜は更けて朝は近い、もうじき太陽が昇るぞというわけだ。マルコ伝では、

「神の国は近づけり、汝ら悔改めて福音を信ぜよ」

とある。さっきのマタイ伝では、

「なんじら悔改めよ、天国は近づきたり」

と、言葉がひっくり返っている。マタイ伝では、キリストの言葉もやはりヨハネと同じような順序になっている。マタイ伝 4 章 17 節では、

「<sup>17</sup>この時よりイエス教を宣<sup>おしえ</sup>べはじめて言い給う『なんじら悔改めよ、天国は

近づきたり』」

とある。けれども、マルコ伝になると、順序が反対になっている。それはどつちを先にキリストは言われたか知りませんよ。けれども、イエスの心はむしろマルコ伝の方の、

「時は満ちた。神の国は近づいた」

と、ガーツとそれを語って、そして

「だから、悔改めろ」

と。これの方が本当だと思う。「悔改めろよ」と、それから、「天国は近づいた」と言うのは、まだちょっと間がのびている。

「時は満ちた。神の国は近づいた」

と畳みかけて、キリストはこの福音を語って、

「だから、悔改めよ。だから、こつちを向けよ。そつぽを向いているな」

と言う。恩寵を先に語って、そして、信仰を語る。「信仰を持って。そうしたら、恩寵がくるよ」ではないんです。恵みが先なんです。恵みが本当は先で、また終りなんです。

「我は始めにして終りなり」(ヨハネ黙示録 1:8)

と言うが、

「恵みは始めにしてまた終りなり」

ということですよ。

### ●神の誠そのもの

「神の国、天国は、神さまの支配することは間近かに来た」

と。イエスの言葉はすべて、我々人間の言葉みたいに空言でない。実言である。実の言葉だから、実に現れるんです。実言なるが故に実現する。キリストの言葉は空言にあらず、実言である。実のある言である。だから、これは必ず実現する。言がそのように実現することを「誠」と言う。「言は成る」のです。神の言はイエスというひとに成った。イエスと



いう人物は、天界のキリストがナザレのイエスというものに成った。これを「誠」という。イエス自身が誠そのものの、神の誠そのものなんだ。

「人間はみんな偽りだが、ただキリストだけは誠である」と、パウロも言いました。

そのように、「神の国は近づいた」と言うが、どうしてそれが実言であるかというのと、彼自身が神の国のひとだから。天国人だから。彼自身が神の御旨を本當に行い、神の御旨を本當に聴き従っている。即ち、神の支配しているもの。神の御意が支配している者はナザレのイエス・キリストです。イエス・キリストがまず自分が本當に神の王国、即ち神の御旨の支配する中に完全に取り入れられて、

「自分の意こころではありません、あなたの聖意みこころです」

と言って、はつきりこれを立てて、自分自身が即ち天国体と成ったから、

「天国は近づいた」

と言った。それが本當の実言である。イエスは天国人、神さまの聖意の支配しているところ。神さまの聖意が支配しているひとは本當の天衣無縫、自由なひとです。この驚くべき自由を知らないで、何を「自由、自由」だなんて言っているかという。それはとんでもない不自由なんだ。自我というやつに囚われているところの、とんでもない不自由なんだ。すること為すことがみんなおかしくなってくる。

どうしても、そのことに気がつかなければ、もう日本の教育なんてものはダメです。なぜ、それを言っつて悪いか。私は全国私立高等学校長会議で二千人の校長の前でそのことを言つた。

「今はもう、教育は本當の意味において、宗教心というものを植えつけなければダメだ」

ということを私ははつきり言つた。文部省の役人も幾人も壇上にいた。私はそういう無鉄砲なやつですよ。けれども、私の中に御霊の真理が来たら、これはしょうがない。

皆さん一人ひとりびりがそうです。キリストに酔つってきたらば——「酔う」という言葉はちよつとおかしいけれども、エレミヤは

「神の言ことばに酔つた」

と言うが——我々は本當にキリストに酔つてきたらば、もうこれはしょうがない。本當にキリストに酔うことは、本當に醒めることです。

### ●屍を乗り越えて

私はこの10年間あまり、福音書ばかりやっていた。無教会の塚本虎二先生というのは、伝道の集会のほとんど大部分を福音書にかけてきた人です。だから、塚本先生の福音書の註解というものは、註解としては日本一のものです。実に、微に入り細にわたって、たくさ



んの参考書を読んでよく丹念に調べて、そして無教会信仰の角度から書いておられる。私は丸の内で塚本先生の講義を聴いていて、一回といえども

「今日はずまらなかつた」

と思ったことはない。藤井先生でももちろんそうでした。内村先生でもそうです。内村、藤井、塚本という三大先生に私はついてきた。しかし、無教会がパウロの中にもうひとつ突っ込んでくれたならばよかつた。無教会は足踏みしてはいかん。突き進んで行かなければ。乗り越えて行かなければ。内村先生が死んだときに、藤井先生は

「この屍しかばねを乗り越えて我は進み行く」

と言つた。それから、四か月で先生自身も仆れてしまつたけれども。私は藤井先生をまた乗り越えて進んで行く。私が仆れたら、あなた方はどしどし乗り越えて進んでもらいたい。神の国は無限量の内容をもっていますから、「これでいい」なんて言うことはひとつもない。

「追求してやまず」

と、パウロ自身も言つている。パウロは、また私たちは、キリストに捕らわれたから、いよいよ追求するんです。キリストに捕らわれたから、いよいよキリストを追い求めて行く。これが本当の姿なんです。

「捕らわれたから、もうよしよし」

なんていう世界ではない。どしどし鍛えられて行かなくてはいかん。神は愛する者を懲らしめ鍛え給う。

### ●罪は雲散霧消した

イエス・キリストはそのような天国体でありまして、そして事実、キリストもパウロも使徒たちもみな、

「本当に絶対的な神の国がやって来る。もうこの歴史はそこでひっくり返る」

と思つていた。マルコ伝の13章に、天地は巻き去られてしまうような恐ろしいことが書いてある。パウロの中にも、ペテロの中にも、いわんや黙示録において書いてある。

「お前たちの中に、天国が来るまでにまだ生き残っている者がいるぞ」

なんて、キリストはそこまで言われた。

「それでは、キリストの預言は違つてしまつたではないか」

なんて、それは額面の上からは違つてしまつた。すぐ来るかと思つたら、神さまは

「ちよつと待て」

というわけで、もう二千年も待つている。神の国が来るまで、まだこれから何年待つか知らん。けれども、

「いつでも、今晚にも、明日にも」



というのが神の国を待つ姿なんです。いや、時が過ぎれば過ぎるほど、神の国の迫りは質的には強くなっている。最後の審判というのがある、そして新天新地が来る。

### 「神の国は近づいた」

と言われた。実は、自分自身がやって来たから、本当にこれで近づいたことがはっきりする。そこで、この音信おとずれはすべて神の国の音信なんです。

「絶対的な生き方をしなさい。相対界を絶対界としなさい」ということです。

私は今日ここに「彼岸」と書きました。私は前に自分のことを「彼岸」と号した。僕はいろいろな号を持っているんだ。この頃は「弦月」という。どうせ、地上では満月に成りつこないから、「弦月」にしてしまった。これは冗談じゃない、本当です。ただし、これは満ち行く月でありまして、減っていく月ではない。上弦の月です。これは天界において満月となるのが約束されている。しかし、この不完全極まるやつは、雲なんかがかかってしまつてしようがない(笑)。「月」という字は、月に雲がかかっている象形文字(半円の中の二本の横線が雲を表す)だから、中国人は大したもんだな。私もなかなかこの雲がとれない。けれども、この雲はあれどもなきが如く。この光はキリストの光がやってきて——私が光っているのではない——キリストが光つてくださるから、こんな雲は雲散霧消してしまう。「汝の罪は雲散霧消した」とイザヤ書44章22節に、本当にありがたい言葉がある。

「<sup>22</sup>我なんじの愆とがを雲のごとく消し、なんじの罪を霧のごとくにちらせり。なんじ我にかえれ、我なんじを贖いたればなり。」(イザヤ44・22)

と。「帰って来たら、贖うぞ」ではない。

「もう贖ってしまったから、帰ってきなさいよ」

ということ。それで、私は帰れるんです。皆さんは、帰って来てから贖われる立派な人が多いかも知れませんが、私はダメなんです。私は贖われてしまわなければ帰って行けないやつなんです。十字架で贖われてしまわなければ、帰って行けない。エレミヤ記の中にそういう言葉がある。

そういうように、贖ってしまったから、もうこんなもの(雲を表す二本の横線)は雲散霧消して、「月」という字は中の線は要らない。これが本当の月です(笑)。これは何と言うか、贖われたる月である。これは今日初めて言った。

あなた方、聖書の中の「御国」や「天国」や「神の国」という字に○印をしてごらん。たぐさんあって、楽しくてしょうがないよ。また、パウロの書簡で「御霊」とか「聖霊」とかいうところを黄色で印してごらん。そうしたら、もう聖書は楽しくてしょうがない。喜びのおとずれですからね、皆さん。我々の生命というものは、神さまは本当に、喜びのおとずれです。キリストにかかってきた御言は何ですか。「我れ汝を悦ぶ」と言う。

「また天より声あり、曰く『これは我が愛しむ子、わが悦ぶ者なり』」(マタイ3・)



17)

という。およそ、人間のすることに喜びが伴わなかったら、それは本ものではない。例えば、食堂で大勢のご飯を用意するときに、一生懸命でいろいろお給仕だの何だのをしてくださるときに、

「ああ、面倒臭いな」

なんてやっていたらダメですよ、楽しくやってくれなければ。楽しくやってももらわないと、ご飯がおいしくなくなってしまう。すべて、やるのが楽しい。みんな、本当に心からやるのが福音の生活です。そうやって生活の中で味わっていかなかったなら、「福音、福音」なんて、いくらやってみたって、これはしょうがないですよ。

### ● 霊の貧しき者

マタイ伝 5 章 3 節。ここに「天国」が出てくる。

「幸福なるかな、心の貧しき者。天国はその人のものなり」(マタイ 5:3)

もう、私はここは何度言うか知れない。

「幸福なるかな、霊の貧しき者。天国はその人のものである」

簡単に言うと、

「幸福なるかな、霊の貧しき者。その人は天国人なり」

と言ったって構わない。私たちは、クリスチャンは、地上において望みは彼岸だけでも、これは彼岸即此岸ですよ。真理というものは、その両極をピシッと一つにもたなければ、本当の真理にはならない。彼岸即此岸。彼の岸は即ち此の岸なり。天界と地界が天地一如の世界です。

「聖意の天に成ることく、地にも成らせ給え」

という。天と地とは一つになる。西と東は一つになる。

「東もなし西もなし」

という。昔の坊さんはそう言って行脚した。そういう境地に入ったら、もう楽でしょうがない。そういう天地一如、彼此岸一如ということですよ。

「さいわいなるかな、霊の貧しい者」

と——イエス・キリストは教えていらつしやらない——自分を告白していらつしやる。イエス・キリストは全身をもって語っておられる。必ずそれは体験から発している。頭でなんか一つもものを言わない。大体、神学者なんてのは頭で神学しているから、妙な神学になるけれども。本当の神学は頭の神学ではない。もし神学と言うなら、全身の神学です。私の「無教会神学論」なんていうものも、そういう角度から「神学は神学を嘲る」と私は書いた。いわゆる神学ではダメなんだ。本当の神学は、神学を嘲る神学でなければダメだ。キリストは体験からものを言っている。「さいわいなるかな、霊の貧しき者」と。霊的に言っ



たら、キリストくらい霊の豊かなひとはいない。もの凄いんです。ところが、イエスは自分を、

「霊が豊かで、俺は霊的人物だ」

なんてやってない。霊的というのが鼻に付いているようなのは困るよ。

「何だ、あのバカ面は。あのとぼけ面はなんだ」

なんて、それくらいに思われなければね。

「あれは霊的で、どうも近づきがたい」

なんていうのでは困る。

イエス・キリストは霊が貧しい。全部、神さまです。「善き先生」なんて言われると、

「なぜ、私のことを善いと言うか。神さまの他に善いものはあるか」

と、キリストがはつきり仰った。何か出来るかと思つたら、

「私は何も出来ない。神さまがさせているんだ」

と。何か言えると思つたら、

「私は何も言えない。神さまが言わせているんだ」

と。そういうひとですよ、イエスというひとは。

本当に自分が、霊が徹底的に貧しい。だから、私はキリストのことを「無者」と言っている。いい言葉だな、この「無」というのは。東洋人は「無」という言葉が好きなんだ。西洋人はすぐ虚無だと思ふけれども、これはニヒリズムではない。いわゆる虚無主義なんていうのではない。

学生は——学生に限らないけれども——ヨーロッパのものを読んで、いい気になつているが、あなた方は東洋と日本の古典をよく読みなさい。ギリシャ思想なんていうものは、それは自然科学の方ではやったかも知れないけれども、大事なものの考えかたは東洋の方にあるんですから。

だから、私は「キリスト教」なんて言わないで、「キリスト道」と言っている。さきほどの「砕け」であろうと、「誠」であろうと、これはみんな無の世界です。いわゆる「真実」なんて言うて、凝り固まつてはダメですよ。明け渡されたる世界です。自分を何ものともしない世界。イエスはそういうひとです。神さまの前に本当に平伏<sup>ひれふ</sup>しの魂であった。「平伏しの魂」というのは、ただボヤツとしていてということではない。「平伏し」「無」ということは、神さまを一切とするところのもの凄<sup>すご</sup>い烈<sup>れつ</sup>しいものがそこにあるんです。だから、無即無量という。ボヤツとしている虚無的な無ではない。私心のない、自分を投げかけているところの世界はもの凄<sup>すご</sup>い烈<sup>れつ</sup>しいものです。

「汝の御意<sup>みこころ</sup>を成させ給え」

という祈りほど烈しい祈りはない。最も力強い祈りは「汝の御意を成させ給え」という。これは傍観して祈れないんですから。

「御意の天に成る如く、この我を通して、成らせ給え」



と言って、しゃにむに自分を投げかけているのが、この「御意を成させ給え」です。そうしたら、無限無量なものがグーツとやってきて、澎湃ほうはいとして、キリストの中にこの御言が御業が展開し始める。だから、

「天国は、神の支配するところはそこにあり」

「天国はその人のものなり」

と。即ち、

「その人は神に支配される者なり」

と言ったつていい。天国人とは神において動いている者。しかし、私たちは神さまに直結できない。私たちはキリストです。

### ● 無を賜る

「さいわいなるかな、霊が貧しい」

と言ったつて、そこまで行かないんだ、どうしたつて。そこまで行けば、大したものですが。一時的には、行った気持になつたつて、それはダメですよ。

「さいわいなるかな、わが十字架によって、完全に自己がすつ飛ばされたお前」

ということですよ。私は相変わらず、すつ飛んでない。私は死に至るまで、すつ飛んでいない面がありますよ。けれども、そいつを本当に現実にすつ飛ばすまでは私は救われられないというのなら、私は救われようがない。皆さんは救われるかも知れないけれども、私はダメだ。私は地獄行きだ。けれども、その地獄的な野郎の中に、そいつを地獄から引き上げるものがある。即ち、キリストの十字架は、私の一切に拘らず全部これを贖い取つてくださつてある。だから、そこに本当の砕けを賜る、無を賜る。どんなに相変わらずダメであろうとも、賜つて進んで行く。弦月がやがて満月となつて進んで行く。この希望とこの現実、キリストの力が来てくださるから。もちろん、私はそのためいろいろ鍛えられたり、ひっぱたかれたり、ひっくり返されたりしていい。けれども、それは全部、恵みの神さまの、キリストのなさる業である。

そのようにして、

「さいわいなるかな。わが十字架によって、汝、無者とされたる者、霊の貧しきものときれたる者よ」

という、その場からして、

「いよいよ、あなたを求めて行きます、いよいよ、あなたを追求していきます」ということが、そこから湧いてくるんです。だから、そこには、

「聖霊の我、汝のうちに来たれり。天国の中核は出来たぞ。いよいよ、天国人と成れよ」

ということですよ。「成りきつた」なんて言っているのではない。



「もうその場が出来て、始まったから、いよいよ、天国人となれ」ということ。地上では成りきれませんが、成りきれませんが、進んで行きます。しようがない。

### ● 恩寵の事実

天国は、神の支配は、そのようにして神に自分を投げかけて行く人には必ず、神の国がそこに現れることは、恩寵の事実として来ます。もう、それ以上は説明の世界ではないから、体験するよりか仕方がない。いくら説明し切ったって、どうにもならない。だから、

「聴く耳あるものは聴くべし」

とキリストは言われた。キリストの福音は、聖書の世界は、身をもって身しんどく読しなくては。「身体からだで読む」ということは、ただこれを全身で読むということばかりではない。存在そのもので生活をもつて読むことが、これが聖書を読むということ。聖書を食らうということ。キリストを食らうということ。

「我を食らえ、我を飲め」

という。

「躓いても転んでも、泣いてもわめいても、とにかく、行きます」

ということ。それでキリストを棄てたらダメですよ。誰に何と言われようと、誰に棄てられようと、誰に審かれようと、いいですよ。

### ● 十字架を負って進んで行く

イエス・キリストは、ルカ伝15章の「父の慈悲」をもつて、その愛をもつて私たちを贖い取りながら進んで行かれた。七度を七十倍しても赦しながら進んで行かれる。

「幸福なるかな、義のために責められたる者、天国はその人のものなり」

とある。今度は非常に積極的な面です。「霊の貧しき」というのは先ず一番土台の世界です。「幸福なるかな、義のために」というのは、これはキリストの義です。キリストの義をいただいて、そのために迫害され、殉教的な最後を遂げて行った幾多の人たちがある。

「義のために責められたるもの、天国はその人のものなり」

とは十字架を負っている世界です。十字架の恩寵を受けて、今度は十字架を負って進んで行くわけです。十字架にはこの二面がもちろんある。土台は何といってもキリストの十字架に完全に負われたこと。そこから、或る力がやってくる。そうしたらキリストの義がやってくる。天地を貫くところの神の意志の成るところが神の義です。即ち、天国は神の義の貫いているところ。神の愛の貫いているところ。もう義も愛も一つになってしまふ。

それが、「義のために責められたるもの」。いや、実に地上においては、どうしてもクリスチャンは何らかの十字架を負わなかったらば、天国に行けない。我々は何らかの十字架をみん



な負わされて進んで行く。

「御名のために傷跡を持たずして、天国に行こうとしたら、それは本当の恥である」

(「聖名のため受けし傷痕もたずして御前に出づる恥知るやきみ」)

という歌をいつか紹介したことがありますね。あのようなことです。

## ●万人救済

では、マタイ伝13章に入ります。マタイ伝13章というのは「天国章」とも言うところです。天国のことが畳みかけて書いてある。

24 また他の譬たとえを示して言いたもう『天国は良き種を畑にまく人のごとし。25 人々の眠れる間に、仇あだきたりて麦のなかに毒麦を播まぎて去りぬ。

サタンのやつがやって来てね、

26 苗はえ出でて実りたるるとき、毒麦もあらわる。27 僕ども来りて家主いえあるじにいう「主

よ、畑に播きしは良き種ならずや、然るに如何にして毒麦あるか」28 主人い

う「仇のなしたるなり」僕ども言う「さらば我らが往きて之を抜き集むるを

欲するか」29 主人いう「いな恐らくは毒麦を抜き集めんとて麦をも共に抜かん。

30 両ふたつながら収穫まで育つに任せよ。収穫のとき我かる者に「まず毒麦を抜き

あつめて、焚やくために之を束つかね、麦はあつめて我が倉いに納れよ」と言わん』

「麦をも共に抜いてしまいうから、放っておけ」

と。私たちはみんな麦みたいなものです。麦でも稲でもいいですが。とにかく、T君あたりだったら、すぐ毒麦なんてのは、病気のついたのは見分けて、スツスツと簡単に抜きなさると思いますけれども、我々がやったら、この僕と同じように、良いものも抜いてしまいかも知れない。

「庭もせに草刈りかねつ撫子なでしこの花や交まじると思おもうばかりに」

という正岡子規の歌がある。庭いっぱい狭いほどまでに草が生えてしまつて、それを抜こうと思うけれども、ヘタすると撫子も抜いてしまふと悪いから、放っておこうという。あの気持がこの譬話によく似ている。

「麦と毒麦」と言いますけれども、私たちは麦になったり、毒麦になったり、いろいろするわけだ。

「俺はもう麦だから大丈夫だ」

なんてのはダメ。

「俺は毒麦で、しょうがない」

なんて、あまり絶望することもない。この「毒」というやつは、入ったり抜けたたりいろいろする。これはサタンが作用するから。



「人間はその人が棺を負うまで批評してはいかん」

という言葉がありますけれども。棺を負ったつて、人の悪を暴くものではない。果たして本当に麦として成長し終わるか、とうとう毒麦になってしまったということになるか、天国行きか地獄行きかは、総決算にならないと分からないから、「放つておけ」と仰る。

「最後の審判まで放つておけ」

と仰るわけです。キリストは、

「善き者にも悪しき者にも、正しき者にも正しからぬ者にも——直き者にも直からざる者にも、清き者にも清からざる者にも、頑かたくなる者にも頑かたくなる者にも——雨を降らせ、日を昇らす。その父の全きが如く全かれ」(マ

タイ 5・45 ~ 48)

と言われた。とにかく恵みを与えろ、恵みをわかち与えろと。大事なことは毒がかかったら、

「あの野郎は毒麦だから、俺はもうあんなのとは交わらない」

なんて、そうではない。

「その毒を何とかして癒してやりましょう」

と。ここですよ、問題は。ここでは「放つておけ」ということになっていきますけれども。毒をも、毒麦をも逆に治してしまおうという。これは聖霊の世界です。聖霊の愛の世界です。イエスは万人救済という気持をもつていらつしやる。まあ、ここでは、そこまでそういった気持で仰つたかは別問題としても。とにかく、善き麦を抜いてしまうようなことがあつてはいかん、ということが直接の気持でしょうけれども。しかし、とにかく、

「終りまで放つておけ」

ということは、大きな大慈大悲がそこにあるからです。私はここで、そこまで読みたいわけです。だから、相対的な善悪なんていうものを判断して、品定めするなと。もう一つ奥の世界から見やれと。これは親鸞の歎異鈔を見れば、その通りです。

「善人なをもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」

という。その「善人、悪人」と言いましても、結局のところは絶対的な判断ではない。絶対的に善なるもの、絶対的に悪なるものはないんだよ、人間は。それは悪に囚われたりするけれども。みな救済され得るんです、いかなる極悪人といえども。もう死刑執行の最後の瞬間に、本当に悔改めれば、それは首をはねられても天国に往く。あの盗賊がそうだもの。

「私はさんざん悪いことをして、十字架に架かるのに働するやつで、仕方がな

いけれども。せめても、御国にいらつしやる時は覚えてください」

と碎けたら、

「汝、今日、我と共にパラダイスにある」

と。イエスの福音は絶対無条件に、碎けたる魂を天界に引き上げる。パリサイ的なものは

「どつどつ(だめだ)」



ということになる。そういう意味におきまして、望みは最後の瞬間までかかっている。いや実に、最後の瞬間にもなお悔改めない魂のために、一生懸命で坊さんはお経をあげて、何とかこれを執成して成仏させようとやっているのが、あれがお経ですよ。まあ、そういう人ばかりでは、もちろんありません。けれども、お経の意味はそこにあるわけです。我々も本当に聖書を読み、祈り、讃美歌を歌うのも、みな本当にその方をどんどん天国に凱歌を上げて進ましめるためです。

### ●天国素

そういうことで、「麦と毒麦」のキリストの譬話も、もう一つその奥を、御意をさぐってみると、万人救済への——私たちは麦になったり毒麦になったりするが——本当に麦として全うせんがために忍んで待つて、鎌を入れない。

31 また他の譬を示して言いたもう『天国は一粒の芥種のごとし、人これを

取りてその畑に播くときは、32 万の種よりも小さけれど、育ちては、他の野菜よりも大きく、樹となりて空の鳥きたり、其の枝に宿るほどなり』

非常に簡単なお話です。「一粒の芥種」、これもいつか清里の集会でお話しました。小さい、小粒だけでも、そこにはもの凄い生命力が宿っている。天国素というのは何か。これも今日初めて書く。天国素というのは、これが聖霊なんです、御霊です。芥種がこの凄い天国素をちゃんと宿している。そして、これが神の光を受け、大地の養分を吸って、ぐんぐん伸びていく。鳥が宿るほどまでに大きく成っていく。一人のひとが本当に天国素となれば、芥種一粒となっていけば、その人が本当に生きていくときに、自ずから人々が救われていく。何も集会をすることが伝道ではない。その人を見て、

「いやこれはどうもやつぱり福音というものは凄いものだなあ」

と言って、人がやつてくる。また、ある時は

「これをちよつと読んでごらん下さい」

と、それがきっかけになることもある。いろいろなチャンスがあるわけです。

芥種一粒が大きくなって鳥が宿するというが、鳥をも宿すような、そういうった幸いを人に与え、喜びを人に与えるような、そういうったものが即ち天国人です。天国人は、自分が天国人になってノホホンなんていうものではない。そんなものは天国人でも何でもない。天国人というのは天国をそこに現じて、その人のあるところに必ず天国がその周りに展開していくようなひと、それが天国人です。

### ●天国の徴

何よりも、イエス・キリストがそうでした。キリストのところにな、驚くべき群衆が自然に集まってきた。集まってきたが、残念ながら、本当にキリストを受けなかった。徴



を本当の徴として受けなかった。イエス・キリストの言葉と行為が本当の天国の徴であったんだが、それを受けそこなつたから、本当の信仰に入れなかった。けれども、イエスは、そのような天国の徴を自在に、四福音書の各頁にあるが如くに蒔き散らしておられた。

他の人に天国素を植えつけるようなこと、即ち、聖霊が次から次へと伝わっていくような事態。そういうことが、今までのキリスト教界に非常に希薄であった。そこへいくと、あの日本にやって来たザビエルという坊さんは偉い。彼は日本語なんか知りはない。それがしゃべっていければ、何だか知らんけれども、その神の気が、キリストの気が漂うわけです。彼の行為によって、キリストの愛が本当に浸透する。彼が手を按けば、病ももちろん癒えた。何万人という信者ができた。すぐ無教会は、今まで——今も言っているかどうか知りませんが、んけれども——

「カトリックはどうだこうだ」

なんて、そんなことを言えたがらではない。カトリックであろうと何であろうと、本ものは本ものですから。人間を概念規定して品定めしてはいかん。

「神知り給う」

という世界がある。

## ● 一 つ

そういうようにして、どんどん広がっていく。

<sup>33</sup>また他の譬を語りたもう『天国はパンだねのごとし、女これを取りて、三斗との粉の中に入るれば、悉ことごとくとく脹ふくれいだすなり』

膨れあがつて大きなパンができあがる。

<sup>45</sup>また天国は良き真珠を求むる商人のごとし。<sup>46</sup>価たかき真珠、一つを見出

さば、往もきて有もてる物をことごとく売りて、之を買うなり。

一つの真珠は他のものとは代えられないという。昔の本当の武士は素晴らしい日本刀を買うためには、一切のものを売つて、一つの日本刀を買う。雨が漏るような荒屋あばらやに住んでいても、そこに隠されているものは、「抜けば玉散る」というような日本刀だよな。

一つの天国は他のものと、何ものとも代えられない。しかも、この天国素は、聖霊は、これをいただいたら、正直もう何ものとも代えられない。私は本当にそこをとかく——こんな野郎だけでも、相変わらずダメですけれども——突き抜けましたので、ダメなやつの中にダメでないものがはつきりあるから仕方がない。

「御霊みたまを宿とどめる者はキリスト者にあらず」

とパウロがはつきり言つてしまった。けれども、

「私はまだクリスチャンではないから」

なんて、そんな心配は何もいらぬ。大丈夫です。



この天国素である聖霊、御霊。これはもう本当に代えられない。ヨハネが言ったでしょ。  
「天国は近づいた。私は水でバプテスマを施すけれども、後から来る人は聖霊  
と火でバプテスマを施す人々だ」と。

この「真珠」は即ち御霊です。これを見いだしたら、これを得るためには、何もかもみな売ってしまつて、それだけを「一つ」を買う。人間というのは結局、「一つ」なんだ。我々は生涯を通して、一つのことしか本当は出来ないんだ。

私が学校の先生をやりながら、片手間伝道をしているのは、およそ本当は間違っている。だから、本当はもう止めた方がいい。申し訳ない。一つのことしか出来ない。もう30年で、或る意味においてはお終いで、今度から、或る一つのこと打ち込むつもりですけれども、けれども、皆さん、私は分裂していたのではない。分裂していたら、本ものは出てこない。なるほど、生活の上では、

「あいつは不徹底な野郎だ」

なんて思われるかも知れません。けれども、一つのはつきりしたものが、この不徹底と思われる姿の生活の中心をグーツと貫いてきたから、私は来たんです。それでなかったら、私は偽りになる。そうではない。

パウロさんも幕屋造りをやりながら伝道していた。キリストは、幕屋造りなんかしなくたって、伝道なされた。まあ、いろいろ形がある。ナザレのイエス・キリストを他のものとの例に引っ張ってきたら、申し訳ない話だけれども。

「一つ」ということ。一つのことしか出来ない。また、本当に一つのものにおいて生きる。その中心は、いろいろなことをやっています。本当にその「一つ」ということが自覚されていると、この「他」が実はその「一つ」に集中している。ただ形の上で一つに整えたって、それはダメですよ。ある時は、並行していることがあるかも知れない。けれども、これがみな、この一に向かつて、あるいは、一から来ている何ものかによって動いている。そういう「一」において動けということ。そういう中心のある動き方をして行く。

### ● 台風の日玉

ちようど、台風みたいだな。台風の日玉は無の世界です。あそここの所は無風状態だ。一番中心は無風である。無風の中心を持ったやつがもの凄い展開をしていく。どつちから風が来るかと思つたら、西から来たり、東から来たりする。これは転回しているんだから。転回しながら、どこかへ向かっていく。そして、グーツと進んで行く。そういうった台風式な歩きかたです。台風が来たら、

「ああ、これは楽しいな」

と言ってやっていなければ。「恐いなあ」なんかではなく。あの台風の姿は私に似ているなど。



そういうことで、一切の自然現象が楽しくならないといかん。水を見れば水となり、風を見れば風となり、無風を見れば無風となり、滝を見れば滝となり、雲を見れば雲となり、お天道さんを見ればお天道さんとなる。大自然と融合する。そういつた自在な柔軟心というものは、一つのもの凄い中心を持つと出てくる。そのもの凄い中心はイエス・キリストである。

「キリストに代えられません」

という歌があるが、本当にそうです。この「真珠」というのはキリスト、御霊のこと。それを持つたら、もう他のものとは代えられませんということ。

天国はまた、そういうように周りに展開してやまないから、一番本当の意味で、共同体ができるんです。そこに生命体ができる。天国は決して個ではない。それは生命体であり、有機体である。組織ではない。我々、キリスト召団は決して組織ではありません。それぞれの集会は、みんなこれは独立自由なるものです。ただ、キリストの名においてのみ、御名においてのみ、一つなんです。御霊においてのみ一つである。私が何者かでも何でもない。私は何者かだったら、今日さっそく、返還しなければならぬ。しかし、そんなことではないから、返還する必要もないんですけれども。

そういうイエス・キリスト、御名、福音。これが一切であり、中心であるところの共同体、生命体であるから、誰がこれをどうしようしようとしたって、どうにもならない。ちゃんと一つである。人間だから、「一つだ」なんて言ったって、ガタガタすることだってあるよ。ガタガタしながら、しかし、それを乗り越えて一つである。

「もつと一つにならなければならぬ」

なんて、「ならない」なんて言う必要はない。

「ならざるを得なくなっていく」

んです。本当の一つの中心を持つて、いつもそこに一人びとりが立ち返っていく。

私たちは相対的な現実でいろいろな地上の秩序や関係がありますよ。地上の秩序や関係があるけれども、私たちは、一つ絶対の世界で本当に天国人は、文字通り兄弟姉妹であるということなんです。私たちは本当の意味において兄弟姉妹である。これが神の支配して居給うところの天国であります。神の意志は恐い意志ではありません。大きな大和をもたらせるところの御意です。

ユダヤ人が

「シャーローム」

と言う。「こんにちは」とか「さよなら」という。あれは「平安」という言葉です。

「平安、汝らにあれ」

ということ。平和でなく平安です。本当の平安があると、人間の間の平和というものがくる。それは喜びです。普通の平和なんていう概念ではない。歡喜が、愛が、愛の喜びが漂って



いる世界です。愛の歓喜の漂っている、愛の生命のただよっている世界。そこが天国です。一人びとりがそのような天国人とならなければ、天国は来ない。天国人はイエス・キリストを受けとるところにやって来る。

「幸福なるかな、霊の貧しき者。天国はその人のものである」

と。これが一番の、何と言っても、土台です。

### ●新天新地

最後の天国がやってくる。神の国がやって来る。終末の世界が。現実には私たちに、

「天国はそこにあるのではなく、お前たちの中にある」

とキリストが言われましたが、今度は、イエス・キリストや、使徒たちが待つていたところの、この歴史の終りの最後の新天新地の、黙示録においてヨハネがパトモスで示されたところの世界がある。これを言いだしたら、また大変だから、今はやめますけれども。どうせ、私たちは百年過ぎるか過ぎないかで、みんな向こう側ですよ。大体、後80年くらい生きたら、みんな向こう側になってしまう。その向こう側、彼岸には、私たちが向かって進んで行くところの永遠の国、神さまの新天新地には、そのときは本当にもはや苦しみの涙もない。しかし、喜びの涙はある。私はひからびた世界は嫌いだ。天的な豊かな、本当の人間性がそこにあるところの世界。そういう、黙示録で描いているところの、

「神の都において生命の水の河が湧き出でて……」(ヨハネ黙示録22章)

と表現しているところの世界です。これに向かつて進んで行く。今、私たちが受けているところの鹿沢におけるところの、この大自然の喜び、恵みも、これも微なんです。やがて来たるべき天界の大なる天国的な幸いの、喜びの、やはり微なんです。この最後の世界の天国を、今、現に私たちがこの相対界において天国というものはつきりと受けとって、キリストを宿して、キリストの天国体となって初めて、

「御国を来たらせ給え」

という祈りが本ものになる。

「神の国を来たらせ給え」

というのは、何となれば、我らの中に神の国が来ておりますから、祈れるわけでありませう。そういう意味において、何とこの福音書のイエス・キリストがこんなにも天国のことを仰ったか。何とこの喜びのおとずれとは現在のでありまた未来的なものであるか。そして、過去をも救い上げていくものであるか。空間的には、天界と地界とが一つの世界である。何だか知らないけれども、えらく壮大なことになってしまった。私たち自身が真の天国素を、即ち聖霊を宿すことにおいて、クリスチャンというのはそれだけの本当に豊かな世界を持っているわけです。

